野草　第27号　1981年

商務版『説部叢書』について

―書誌学的なアプローチ―

中村忠行

(1)

中国近代文学の研究資料として、商務印書館発行の『説部叢書』が重要な位置を占めることは、更めて説くまでもない。林訳小説をはじめ数多の翻訳小説を収めるこの叢書は、規模の大きさから言っても、当代に誇るべき叢書であったが、何故かその実態については、未だ十分に知られていない様である。幸い今日では、上海図書館編『中国近代現代叢書目録』(商務印書館香港分館、1980年2月）の上梓によって、かなり多くの事実が明らかとなった。殊に、従来は、『東方雑誌』第八巻第一号（宣統三年三月）に添えられた「商務印書館出版図書総目録」に、初集一百種百三十三冊の書名を求め、銭清方編『小説叢攷』（『文芸叢刊』甲集、民国五年四月刊）上冊の裏表紙の広告に、二集百種百六十二冊の書名を探るといった労を払っていたのが、この目録によって、簡単に検索出来る様になったことは、何と言っても有難い。

しかし、これで問題が凡て解決する訣ではない。例えば、件の目録では、この叢書の刊行開始を、1903年（光緒二十九年）4月とするが、張静廬輯『中国出版史料補篇』に収める「商務印書館大事紀要」には、1906年（光緒三十二年）の条下に、「開始刊行『説部叢書』一・二・三集」とあって、大きく相違する。

又、件の目録は、永年に亘り何人もの手によって作成された上海図書館の蔵書目録乃至は基本カードによって、原稿を作成したと覚しく、加うるに戦禍・人手不足などの悪条件も重ってか、整理が不十分であり、かなりの杜撰さが目に著くのである。例えば、元版の第一集第三編以下第十編までと、第六集第四編の書名を欠くのは、明らかに疎漏である。又、第一集第八編（初

集第八編）『吟辺燕語』（チャールズ・ラムの『シエィクスピア物語』）の著者を「莎士比亜」とし、第二集第二編（初集第十二編）『回頭看』（ベラミーの『顧みれば』）の著者を「威士」とし、第六集第三編（初集第五十三編）の『美人煙草』（広津柳浪の『美人莨』）の作者を「尾崎徳太郎」とするのは、原本がそうなっているから致し方ないとしても、第二集第九編（初集第十九編）『奪嫡奇寃』を「（日）柴四郎著」とするのは、何処から来た誤りであろうか。これは、ガボリオーの『ルルージュ事件』で、黒岩涙香訳『人耶鬼耶』を重訳したものだが、華訳本には原作者・原訳者の表記はない筈である。

更に、刊記となると、取扱いは一層深重でなければならぬ。『叢書目録』に、この叢書の刊行開始を「1903年4月」とするのは、第一集第三編『夢遊二十一世紀』の上梓を、「癸卯年四月初版」（初集本奥附）とするのに拠ったものと見られるが、この刊記をその侭『説部叢書』の刊行開始と結付けて考えてよいものかどうかに、筆者は少からず疑問を有つ。その理由は、後述するところによって、自ずと明らかとなるであろう。

加之、『説部叢書』本の刊記には、元版のそれと初集本のそれとの間に、相異するものがある。例えば、元版第二集第六編『売国奴』には、奥附に「光緒三十一年十一月首版」とあるが、初集本では「癸卯年十月初版」、すなわち光緒二十九年十月のこととする。又、初集第二十三編『曇花夢』は、奥附に「丙午年四月初版」とあり、第二十九編『一柬縁』には「丙午年二月初版」とあるが、元版には、それぞれ「光緒三十一（乙巳）年八月首版」、「光緒三十一（乙巳）年二月首版」とある（『叢書目録』）らしい。焦点を初集本に絞って見ても、問題がない訣ではない。『叢書目録』に拠ると、初集第八編『吟辺燕語』は「1904年7月初版」、第九編『美洲童子萬里尋親記』は「1904年10月初版」となっているが、管見に入った本には、前者は「甲辰（1904）年十月初版」、後者は「乙巳（1905）年十月初版」となっている。『吟辺燕語』には光緒三十（1904）年五月の林琴南の序文があり、『美洲童子萬里尋親記』には光緒三十年七月既望の林序がある。されば、『叢書目録』の記載の方が一見正しい様であるが、光緒三十年当時、『説部叢書』が既に発行されていたか否かは、問題であろう。

更に、次の様な場合は、何と解釈したらよいか。

懺情記（第二集第八編）

1906年5月3版、12月再版

（注。初集本に、「乙巳年四月初版」とあるのを勘合すると、光緒

三十一（1905）年四月初版、十二月再版、翌三十二年五月三版となるのか）。

桑伯勒包探案（第三集第八編）

1906年4月再版、1907年7月再版

（注。「7月再版」は、「7月3版」の誤りか。又、初集本には「丙午年二月初版」とある。二月初版、四月再版というのは有り得べきことだが、他の例に比して少しく間隔が短か過ぎる様である）。

寒牡丹（第四集第十編）

1906年3月初版、1915年6月3版。

（注。後者は初集本ではなかろうか）。

環游月球（初集第七編）

1905年6月再版、1906年3月3版、1913年7月5版、10月5版、1914年4月再版）。

（注。管見に入った初集本には、「甲辰年七月初版。／　民国三年四月再版」とあるのみ。両者の性格の相違については、後述する）。

各項の後に、括弧を附して、私見を注して置いた。勿論、現物に一々当っている訣ではないから、謬見も尠くあるまい。文学研究の大道からすると、この様な刊記の穿鑿は、余り重要なものではない。しかし、比較文学的な操作を試みる場合には、原典・翻訳双方の初出・版数、それらによって窺われる読者層の厚さと拡がり等々が、常に問題となる。まして、当面の課題からすれば、それは『説部叢書』の性格を解く鍵ともなろうから、忽せにすべきではない。

(2)

上来、いささか触れ来った様に、『説部叢書』には、光緒三十一年以前の刊記を有つものが、尠からず存在する。管見に入った初集本の奥附に拠るも、光緒二十九年初版とあるもの二点、同三十年初版とするもの五点、同三十一年初版とするもの十八点の多きに上る。既述の如く、同一の本でありながら、版によっては刊記を異にするものがあるから、この数値には若干の出入が生じようが、大勢はまず大きく変るまい。これは、『説部叢書』の刊行開始を光緒三十二年とする「商務印書館大事紀要」の記述と、大きく矛盾する。一体これはどういうことなのであろうか。

少しく立ち入って、考察を試みよう。

東京都立中央図書館蔵「実藤文庫」に、『説部叢書』第二集第五編として収める『珊瑚美人』一冊がある。奥附に「光緒三十一年四月首版／光緒三十一年九月再版」とある元版本であるが、この刊記には疑いようがない。蓋し、この小説は、初め『繡像小説』第二十七期以降第四十一期（自光緒三十年五月一日至同年十二月一日）に訳載され、完結の後直ちに単行上梓されたものと、認められるからである。同じ様なことは、第一集第五編『小仙源』（原名『小殖民地』）や第二集第二編『回頭看』についても言うことが出来る。これらの訳本の元版は未見に属するが、初集本の奥附に従えば、前者は「乙巳年十一月初版」、後者は「乙巳年二月初版」と言う。乙巳年は光緒三十一年であるが、前者は『繡像小説』第三期以降第十六期（自光緒二十九年閏五月一日至同年十一月十五日）に、後者は第二十五期以下第三十六期（自光緒三十年四月一日至同年九月十五日）に訳載されたものであるから、如上の刊記は、その侭信じてよい。[1]

これに対し、上掲『夢遊二十一世紀』の場合は、少しく事情を異にするらしい。この小説も、亦『繡像小説』第一期以降第四期（自光緒二十九年五月一日至同年閏五月十五日）の誌上を飾っているが、これは「癸卯（光緒二十九）年四月初版」とされるから、如上の書物とは逆に、単行上梓されたものが、『繡像小説』に転載されたものと、解すべきである。

更に興味深いのは、上にも一言した『売国奴』であろう。原作は、ズーデルマンの『猫橋』で、華訳は、明治三十七年九月十五日金港堂から発兌された登張竹風訳に拠るが、元版（登張正實氏蔵）には、奥附に「光緒三十一年十一月首版。／光緒三十二年三月再版。／編訳者　中国商務印書館編訳所」とあるのみで、竹風訳の重訳たることは伏せられている。しかるに、初集本の奥附には、「癸卯年十月初版。／民国三年四月再版。／原訳者　日本　登張竹風。／重訳者　杭縣　呉檮」とあって、初版上梓の時日を異にするばかりか、原訳者・華訳者の名をも明示しているのである。癸卯すなわち光緒二十九年は、明治三十六年である。重訳の方が、原訳より先に上梓されるということは考えられないから、初集本の示す刊記は誤っていると、一応は考えられる。しかし、そう考えても、尚問題は残る。蓋し、この小説も亦『繡像小説』第三十一期以下第四十八期（自光緒三十年七月一日至三十一年三月十五日）に、連載されているからである。光緒三十年七月一日は、明治三十七年八月十一日に当る。つまり、これに拠るも、冒頭の一節（雑誌掲載の三回

分）は、重訳の方が、原訳より前に公刊されていることになるのである。

按うに、この事実は、「癸卯十月初版」という初集本の刊記が、決して無稽なものではないことを暗示する。しかも、元版では伏せられた竹風や呉檮の名が明示されていることは、これが元版とは別個の資料に基くものであることを物語る。私見にして誤りなくんば、それは商務印書館の原簿であるに相違なく、問題の底には、一時伏せなければならない様な事情があったものと解せられる。それは何か。論は少しく岐路に亙るが、『説部叢書』刊行の経緯を考える上で、解明して置く必要がある。

却説、竹風訳『売国奴』に寄せられた佐々醒雪の序文によると、

> ことし皇師海を渡りてより、軍事小説といふ新しき名に立てゝ刷り巻の数々成りいづる頃、君が豪放の調と艶麗の致と、かの砂上の白骨を描き、この春閨の夢を写さんに、豈何者かしくものあらめやと、強(ママ)ひてそゝのかしたてゝ、名たる(たるカ)ゝ独逸の文豪何某が傑作の翻訳を乞ひ得たるは、折しも金港堂の編輯のことどもとり見る佐々醒雪なり。

とあって、如何にも日露開戦後、急ぎ訳出された趣きであるが、それは販売政策からする筆のあやに過ぎまい。蓋し、竹風は、明治三十三年五月から七月にかけて、ズーデルマンを論じた「独逸の輓近文学を論ず」を、『帝国文学』誌上に掲げ、その一部を『ニイチエと二詩人』（明治三十五年一月、人文社刊）に収めているし、三十五年十月から翌年二月にかけて、「フラウ・ゾルゲ」（『憂愁夫人』）を『帝国文学』に訳載している。『売国奴』の訳稿の如きも、早くから成っていたと見てよい。

ところで、竹風は、明治三十五年の夏頃、金に困ることがあって、小説『あらひ髪』を三日間で書き、書肆文友館に売った。これを側聞した森鴎外が、竹風及び書肆に書を裁して、出版を思い止まる様に忠告したのは、著聞する逸事である。沈思黙考肌の鴎外にして、又後には自らも発禁小説『井タ・セクスアリス」（明治四十二年七月、『アルス』）を書いた鴎外にしてこの挙のあるのは、当時既に教育・文化界の底流として横行し始めていた超国家主義、ニイチエ論争から逸脱して不敬罪で竹風を葬り去ろうとする陰湿な策謀の一部に働いている事実を察知し、竹風に自重を促したのが、その本意ではなかったろうか。しかも、竹風は、この尊敬すべき先輩の忠告をも、棄てて顧りみようとはしなかった。それ程、彼は金に窮していたのである。『売国奴』の訳稿も、恐らくこの時金港堂に売られたに違いない。『文芸叢書 気焔録』の出版（明治三十五年七月、金港堂刊）で、竹風は原亮三郎父子とも面識が

あったろうし、第一其処には佐々醒雪がいた。醒雪と竹風とは、専攻こそ違うが、文科大学では醒雪が一年先輩で、少なくとも顔見知りであった筈である。明治三十二年四月、醒雪は仙台の第二高等学校教授から山口高等学校教授に転任するが、そこでも二人は同僚として交際を深める。更に、三十五年春、醒雪が上京して金港堂に入るや、二人は本郷の同じ下宿で一つ釜の飯を喰う。共に酒豪で、竹風は芝居好き、義太夫などにも通じていたから、俳人で俗曲にも詳しく、近世文学の専門家である醒雪とはウマが合う。話は萬事スムーズに運ぶ筈である。

時あたかも、金港堂と商務印書館との合辦――実際には、金港堂主人原亮三郎個人の投資であったという――の話が、漸く結実した。光緒二十八年（明治三十五年）夏、商務印書館は組織を改め、新に編訳所を設け、教科書の出版のみならず文芸物の出版、『繡像小説』の創刊・『説部叢書』の刊行開始といった新機軸を次々に打出すが、それは明らかに原の建策に因るものと見られ、従って経営方針に於ても、金港堂に見倣うところが尠くなかった。されば、原としても常に若干の手土産なり持駒が必要だった訣で、さしずめ竹風訳『売国奴』の如きは、恰好の出物（でもの）だった訣である。

金港堂・商務印書館の合辦については、樽本照雄君に詳しい研究がある[②]から、それに譲る。もとより、原個人としては、この業務提携を大いに宣伝し、謳いあげたい肚であったろう。しかし、突如として起った教科書疑獄事件（明治三十五年十二月摘発）で起訴される身となっては、それさえも憚られた。日中文化交流史上、劃期的な試みであったこの事業が、当時の日本人の視野には殆んど上らず、両三年を経て、中国側から断片的に情報が齎されている実情は、それを物語る。竹風や呉檮の名が削られているのも、亦その為であるに違いない。

果して然らば、「癸卯年十月初版」という初集本の刊記は、いよいよ以て信ずべきものとなろう。蓋し、教科書事件は、明治三十七年六月最終的な結審を見たので、以後は原も自由に行動出来た筈である。少しく穿ち過ぎるかも知れないが、『売国奴』の『繡像小説』への連載も、この結審を俟って始められたものと見るべく、光緒三十一年（明治三十八年）十一月の時点では、竹風や呉檮の名を伏せる心要は、毫もなかったものと断じてよい。

(3)

筆を原に戻そう。

この様に見て来ると、『説部叢書』の刊行開始を光緒三十二年とする「商務印書館大事紀要」の記載は到底信じ難く、「1903年（光緒二十九年）4月とする『叢書目録』の所説が有利な様に見受けられる。が、果してそうであろうか。

まず第一に懐かれる疑問は、光緒二十九年当時、商務印書館は改組後の日尚浅く、所謂「欽定学堂章程」の公布に伴って必要となった各種教科書の編輯・出版が精一杯の事業で、『説部叢書』といった大規模な文芸叢書の刊行には、とても手が及ぶまいと思量されることである。かの有名な梁啓超の「論小説与群治之関係」を掲げた中国最初の文芸雑誌『新小説』の創刊（横浜）が、光緒二十八年十月十五日（1902年11月14日）であることも、この際更めて見直す必要があろう。

又、初集本の刊記に従うものではあるが、初期のものは、

第三編　夢遊二十一世紀　　癸卯年（光緒二十九年）四月初版。
第四編　華生包探案　　丙午年（光緒三十二年）四月初版。
第五編　小　仙　源　　乙巳年（光緒三十一年）十一月初版。
第六編　案　中　案　　甲辰年（光緒三十年）十一月初版。

の如く、初版上梓の期日が、編序に従ってはいない。それも、一二個月前後する程度のものではなく、年を隔てるものが、雑然と並べられているのである。これは、当初から計劃立案された叢書の出版され方ではない。既刊のものを任意に拾い、叢書に仕上げたことを示すものである。

それを如実に裏書きするのは、版式の多様性であろう。少しく、この叢書の書誌的体裁について記すと、本の大きさは所謂四六版（縦19㎝、横13㎝内外）で、本文には旧四号活字を用い、一頁三十二字詰・十二行、奇数頁にあっては左端、偶数頁では右端の小口に近い部分には、柱として上方に書名、下方に頁数を添える。光緒三十二年以降に上梓されたものは、『美人煙草』他一二の例外を除いては、凡てこの版式が用いられている。勿論、光緒三十一年以前の刊記を有つものにも、この版式に則るものが尠からずあるが、亦次の様に版式を異にするものも、決して尠くはないのである。

四十二字詰・十四行（旧五号活字使用）

『佳人奇遇』　（奥附なし。但し、巻末に添えられた「商務印書館説部書広告」中に、『金塔剖尸記』の名が見えるから、光緒三十一年正月に遡る印行ではない。恐らく、同年春頃に刷られたものかと想像される）。

三十二字詰・十三行。

『経国美談』　（奥附なし。阿英氏の『書目』に「商務印書館光緒二十八年（1902）刊線装本二冊。又商務平装本一冊」とある平装本が、これに当るか）。

二十五字詰・十一行。

『夢遊二十一世紀』　光緒廿九年四月初版。

『小仙源』　光緒三十一年十一月初版。

三十三字詰・十二行。

『回頭看』　光緒三十一年二月初版。

『珊瑚美人』　同年四月初版。

『売国奴』　同年十一月初版。

三十二字詰・十一行。

『美国童子萬里尋親記』　光緒三十一年十月初版。

『黄金血』　同三十年十一月初版。

『美人煙草』　同三十二年六月初版。

こうした版式の不統一は、これらの小説が個々別々に単行上梓されたものであることを物語る。換言すれば、これらの本――何れも編序が若く、従って初期に刊行されたものと見られる――は、そうした先行する本の組版乃至は紙型をその侭に用いて、印刷したものであるに違いない。

『説部叢書』の刊行に先立って、そうした本が単行上梓されていたことは、又次の様な観点からも確認される。例せば、第一集第四編に収める『華生包探案』は、如上の基本的な版式を有ち、光緒三十二年四月初版（初集本）とされる。が、この本は、『繡像小説』第四期以下第十期（自光緒二十九年閏五月十五日至同年八月十五日）に訳載されたコナン・ドイルの探偵小説六篇を彙輯するもので、光緒二十九年癸卯の商務印書館主人の序もあるから、同年末に上梓された刊本がある筈で、阿英氏の『晩清戯曲小説目』にも、それを著録する。光緒二十九年孟冬の彼岸居士の序を有つ『奪嫡奇冤』（光緒三十二年四月初版）も、亦同断であろう。

この二書は、『説部叢書』に収めるに際し新に奥附を附し、刊記を改めたものと見られるが、実際には、既刊の本の奥附をその侭に遺したものの方が多かった。私見に従えば、光緒三十一年以前の刊記を有つものは、凡てそうだと思う。

上に引いた『佳人奇遇』巻末の「商務印書館説部書広告」には、『吟辺燕語』・『夢遊二十一世紀』・『金銀島』・『足本迦茵小伝』・『金塔剖尸記』

等々、『説部叢書』にも収められた小説廿余種が雑然と並べられているが、『説部叢書』という注記はない。加之、書目中には、『絵図聊斎志異』・『繡像三国志』・『空中飛艇』など、『説部叢書』には遂に収められなかった小説も混在しているから、叢書本としてではなく、単行本として広告されているものと見てよい。

ところで、この広告中の『金塔剖尸記』・『珊瑚美人』・『売国奴』の三点には、未だ定価が附けられていない。就中、『金塔剖尸記』には光緒三十一年元夕の林琴南の序文があり、同年三月初版とされていることから推すと、件の広告は、光緒三十一年一月から三月までの間の案文に係るものであろう。換言すれば、この時点では、未だ『説部叢書』は刊行されていなかったと見なくてはならない。

しかるに、爾後一年を閲した光緒三十二年三月に再版された『売国奴』には、巻末に『説部叢書』の広告が見えていて、第一集第一編『佳人奇遇』から第四集第五編『白巾人』までの書名が示されている。この広告でも、定価の示されているのは第四集第二編『玉雪留痕』・同第三編『魯浜孫飄流記』（共に光緒三十一年十二月初版）までであって、第四集第一編『寒桃記』（光緒三十二年二月初版）・同第四編『洪罕女郎伝』（光緒三十一年十一月十五日附の林序・同三十二年一月初版）や『白巾人』（同三十二年三月初版）には、未だ附けられていない。例外として、第三集第八編『桑伯勒包探案』・同第九編『一柬縁』（共に、光緒三十二年二月初版）に定価が記されているが、この奥附は、『華生包探案』や『奪嫡奇寃』の場合と同じく、『説部叢書』本としての奥附が新に附されたのであろう。とすれば、この広告は、光緒三十一年十二月末から翌三十二年正月中旬頃までの起草に成るもので、この時点で既に三十二種四十一冊の小説が、『説部叢書』として出版されていたことになる。この事実は、何を物語るか。

按うに、これらの小説は、書肆の期待に反して、当初は余り売れず、僅かに『華生包探案』以下若干の探偵小説類が捌けた程度で、未製本の侭に積上げられた在庫品は、溜る一方であったと想われる。『説部叢書』の刊行は、実はそうした在庫品を一掃する目的で案出されたもので、それ故にこそ中味は元の侭で扉乃至は表紙を附け換えただけといった体裁のものが、最初は出たのであろう。而して、一旦『説部叢書』として出された本の刊記はその侭定着し、後々に受継がれることとなった。光緒三十一年以前の刊記を有つ『説部叢書』本は、かくて生れたものと推測される。

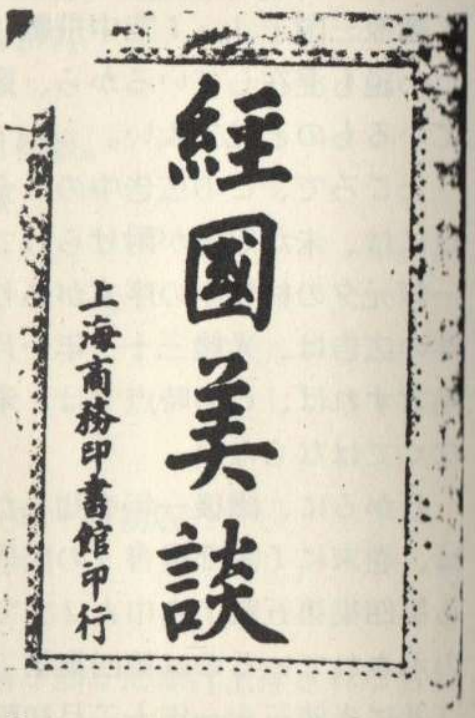
如上の推測を確認するには、『説部叢書』本の装幀について、一瞥して置く必要がある。装幀は平装、つまり二本の針金で綴じたものに表紙を糊付けする仮綴方式で、裏表紙の中央には、新装成った商務印書館の偉容を、写真版で示すものがある。

表表紙の方は、図版を以て示す様に、管見に入ったものだけでも、大別して三形式数種のものがある。以下、略説すると、

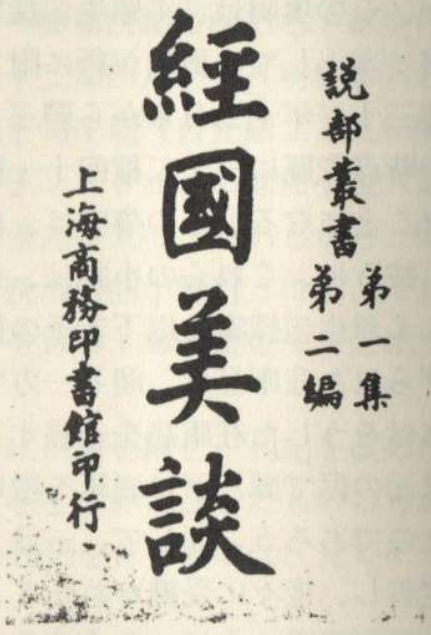
第一形式　『経国美談』（架蔵・写真①）の如く、飾り縁で囲んだ表紙の中央に書名を、左に「上海商務印書館印行」と、楷書体で肉太に縦書きする。「説部叢書　第○集第○編」の文字は、表紙にはなく、緑の色紙を用いた扉（写真②）にあるだけである。この扉は、恐らく後から加えたものであろう。

この形式の本は、『説部叢書』本として最も古い形を示すものと想われる。『叢書目録』に、「前編二十回、后編二十五回、中国商務印書館訳、無版年、316頁」とあるのは、第三形式第一種の表紙を有つもので、印行は掲出本より遅れるであろう。

因みに、「上海商務印書館」を固有名詞と見るか、「上海」は地名と解釈するか、普通なら

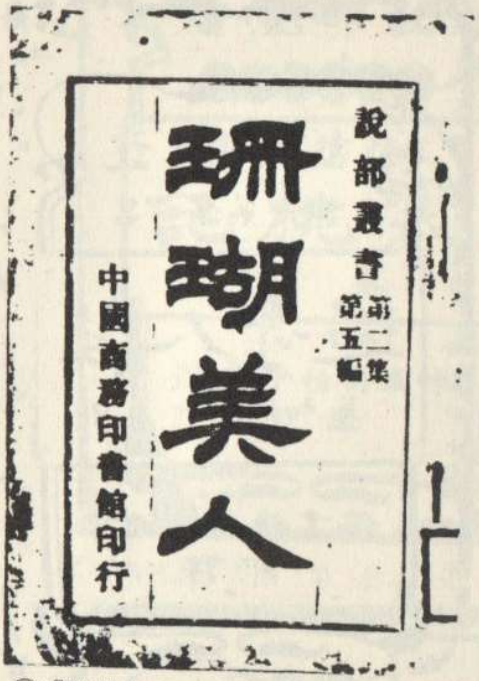


①『経国美談』表紙（第一形式）



②同　扉

ば後者と考えるのが常識であろうが、暫く考えたい。蓋し、筆者は、同書館の正式な呼称は、「上海商務印書館」（創業期）→「中国商務印書館」（日・中合辦期）→「商務印書館」（独立期、宣統三年五月以降？）と三転しているのではないかと、秘かに考えているからである。



③『珊瑚美人』表紙（第二形式）

第二形式　上記の本に次いで出た本であろう。『珊瑚美人』（実藤文庫・写真③）に見る様に、子持ち罫で囲んだ中を縦に三分割し、中央に隷書で肉太に書名を、右欄に「説部叢書第○集第○編」・左欄に「中国商務印書館印行」と、明朝体の活字で印刷する。

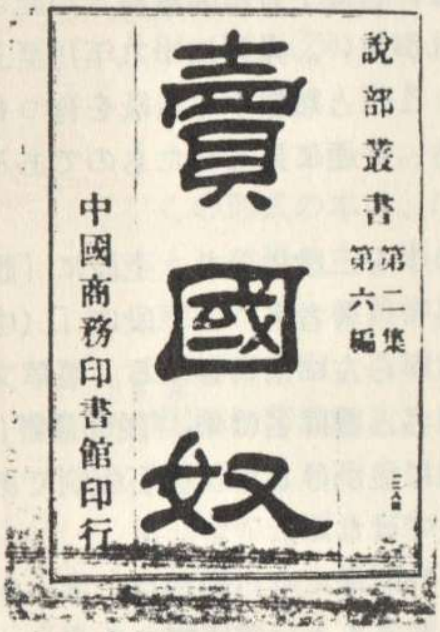
後述する『売国奴』・『美人煙草』の様に、この形式の扉を有つ本もあるから、掲出本も扉に裏打ちした改装本ではないかと疑われもするが、矢張り原装である。扉ならば、右欄下方に図書番号が記されている筈であるが、掲出本にはそれがない。光緒二十九年乃至三十年頃、広智書局で出版したものに、これと類似する表紙を有つものがある（例：『経国美談』）。当時、普通に見られたものであろうか。

第三形式　蔓草文様で縁取りをした囲みの中を三段に分ち、上段に「説部叢書／第○集第○編」、中段に書名・（著者名）、下段に「（中国）商務印書館訳印」と、楷書体で右から左に横書きする。蔓草文様と「第○集第○編」の文字は青、書名と書肆名は朱、「説部叢書」と原著者名は茶に近い朽葉色という様に色別けした三色石版刷であるが、配色は必ずしも一定している訣ではない。

この基本的な図案が何時から採用される様になったかは、審らかでない。が、光緒三十二年も早い頃であることは確実であろう。

これは成功だった。装幀を改めることによって、「新小説」という印象は強調され、爾後、爆発的な売れ行きを示すこととなったか

④『佳人奇遇』表紙（第三形式・第一種）



⑤『売国奴』扉

らである。

この形式の装幀にも、数種の別がある。

(イ) 第一種は、『佳人奇遇』（架蔵・写真④）の様に、書名の下に原著者名を記し、書肆の名も「中国商務印書館（訳印）」となっているもので、扉や奥附がない。

(ロ) 第二種　表紙は第一種本と全く同じ体裁であるが、扉や奥附がある。『売国奴』（登張正實氏蔵・写真⑤）は、これに類するが注目すべきは、扉の体裁が上記の『珊瑚美人』の表紙と全く同じ形式であることで、彼の表紙を扉とし、新たに石版三色刷の表紙を加えた感がある。

(ハ) 第三種　上記二種の表紙に見られる原著者名を削り、代りに「偵探小説」・「冒険小説」・「立志小説」といった角書（つのがき）を書名の上に記し、分冊するものにあっては、書名の下に「巻上（中・下）」の文字を加える。『寒桃記』（第四集第一編、光緒三十二年二月首版。実藤文庫・写真⑥）がその例であるが、同本には扉がない。

(ニ) 第四種。『美人煙草』（第六集第三編、光緒三十二年季夏首版／同九月二版。実藤文庫・写真⑦）の類で、表紙の体裁は上記『寒桃記』と同じであるが、

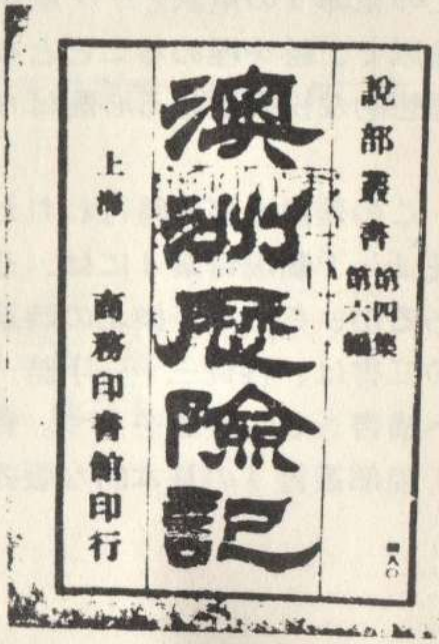
「商務印書館訳印」と、「中国」の文字が削られている。但し、扉（写真⑧）や奥附の方は「中国商務印書館」と旧態の侭であるから、宣統末か民国初年に発行されたものであろう。刊記に惑わさるべきではない。扉の体裁は、『売国奴』に同じ。

(ホ) 第五種。『澳洲歴険記』（実藤文庫・写真⑨⑩）に見られる形式で、表紙・扉とも第四種のそれに準ずるが、扉の書肆名が「上海　商務印書館」となっている。掲出本の奥附には「光緒三十二年四月首版」とあり、裏の広告も第四集第十編『寒牡丹』までとなっていて、内容的には初印本の姿を示すが、恐らくは紙型印刷に成るもので、民国初年に刊行された本と見られる。

⑥『寒桃記』表紙（第二形式・第三種）

⑦『美人煙草』表紙（第二形式・第四種）

⑧　同　扉



⑨『澳洲歴険記』扉

(5)

『説部叢書』の刊行に、原亮三郎の助言があったろうことは、想像に難くない。それは、第一集第一編『佳人奇遇』・同第二編『経国美談』といった配列を見ても、肯けることである。しかし、実は其処に大きな陥阱があった。

少しく注釈を加えるならば、梁啓超訳『佳人奇遇』は、決して原作に忠実な翻訳ではない。到る処に大胆な斧鉞を施し、時には改作に近いまでの筆を弄するが、殊に見遁せぬのは原作後半部の改変である。この部分では、散士は最も得意とする朝鮮問題を縦横に論ずるが、梁訳ではそれが全く抹殺され、「朝鮮者、原為中国之属土也云々」という三百字余りの文字で、突然打切られてしまう。従って、梁訳『佳人奇遇』は、原作者の懐く興亜思想とは裏腹の思想を有つ政治小説と化していると言うも、過言ではない。政治小説の翻訳ともなれば敢て怪しむに足りないし、我々としては、むしろ梁啓超のしたたかさに舌を捲くばかりであるが、それが原に限らず、当時の日本人には気附かれなかった。又、『経国美談』も、著者矢野龍溪の共和的な社会思想が、漸く日本官憲の忌むところとなっていた。殊に、ユートピア的な社会改革論を盛込んだ『新社会』（明治三十五年七月）は、いちはやく披雪洞主人訳『極楽世界』十二回（光緒二十八年刊）として紹介され、彼に革命思想を植付けつつあると、真剣に憂うる者すらあった。現に、華訳から韓国語に重訳された『経国美談』は、日韓合邦以後真先きに禁書となる運命を辿っている。

こうしたことどもは、やがて当時商務印書館に在った長尾雨山・中島端・小谷重などの気附くところとなったろう。かくて、幾度かの接衝の結果、以上の二書は削られ、代るに『天際落花』（ボアゴベイ原作・黒岩涙香訳『塔上の犯罪』の重訳）・『劇場奇案』（ファーガス・ヒューム『死を招ぐ歌』）を以て、跡を埋めることとなった。共に探偵小説であるから、政治的乃至は思想的な扮擾が起る心配はないといった選択の仕方である。

この差換えが何時行われたかは、実のところ正確には訣らない。『天際落花』・『劇場奇案』には、それぞれ「戊申五月初版」・「戊申六月初版」とあるが、これを差換えの時期と見るには、少しく躊躇させられる。蓋し、この二書は、各頁三十一字詰・十二行、上方に波罫を引いて、書名を右から左へ横書きし、頁数をうつ。頁数はアラビア数字を用いるといった版式で、『説部叢書』の基本的な版式とは大きく異る。これは明らかに他からの流用

である。

一方、『説部叢書』の方も、同年六月『雙鴛侶』（オリヴァー・ゴールドスミス『ウエークフィールドの牧師』）の上梓を以て、百種百三十三冊の出版を完了した。刊行開始以来満二年有半、実質的にはそれに倍する歳月を要した大出版であった。

この頃になると、林琴南の活躍も目覚しく、青年達の海外文学に対する関心も深まって来る。機を見るに敏な商務印書館は、そこで新な企画を発表した。既刊の『説部叢書』全揃を買うと、特製の本箱附で二十八元――つまり、三割引で本箱贈呈というおまけ政策である。如上の改訂は、この時に行われたらしい。それと同時に、第五集第三編として上梓した『魯浜孫飄流続記』の編次を繰上げて、第四集第三編『魯浜孫飄流記』に接続せしめ、第四集第四編『洪罕女郎伝』以下第五集第二編『三字獄』までの配列を一つずつ繰下げるという修正も行った。本稿の冒頭に引いた『東方雑誌』第八巻第一号（宣統三年三月）に附録する同書館の出版総目録では、既にそうなっている。

因みに、初集本の奥附には、欄外に注して、「前清宣統三年四月初三日呈報、五月十四日註冊」とある。或いは、この改訂と関係があるかと想われるが、審らかではない。「初集」の名をこの時に用いたか否かの問題と合せて、後考に俟つ。

民国に入ると、民族資本による独立経営を望む声が、商務印書館の内外から起って来る。「中華書局」という強敵が出現したことが、その切懸を作ったという。かくて、金港堂と「磋商すること三載、会議すること数十次を経て」、商務印書館は金港堂の保有する全株を買収し、完全に独立する。

勿論、この間に於ても、『説部叢書』は増刷された。民国二年に限って、これを見ても、

1月　『双孝子噀血酬恩記』三版　／『新天方夜譚』再版。他二点。
3月　『夢遊二十一世紀』六版。
6月　『吟辺燕語』四版。
7月　『環游月球』五版。
9月　『一仇三怨』再版。
10月　『三字獄』三版。／『海衛偵探案』三版。他一点。
12月　『小仙源』四版。／『黄金血』再版。他二十点。

と、依然売行きが好調であったことを示している。

こうした趨勢を、新しく再出発した商務印書館が、見遁す筈はない。かくて、『説部叢書』二集を彙輯し、刊行しようという計画が立てられた。それと共に、既刊の百種を「初集」の名に統一し、各集十編、十集一具という組織を改めて、第一編から第百編までの通し番号として、覆刊を図った。覆刊された「初集本」には、奥附に初版の日附と「中華民国三年四月再版」という刊記があるのが普通であるが、時には民国二年以前の刊記を遺すものがある。それは、合辦時代に刷り置いたものに、「初集本」の表紙を加えたものである。

「名は体を現わす」であるから、勿論、表紙のデザインも変えられた。(写真⑩⑪)。元版の蔓草文様をリボンに改め、上段一対下段二の割合で横に分割した上段には、「説部叢書／初集／第〇編」と、右から左へ三列に横書きする。下段には、中央に草花であしらった縦長の額縁型を置き書名を、額縁型の右には角書、左には書肆名を、それぞれ楷書体で縦書する。書名とリボンの縁取りは朱、他は全部青の二色刷である。

金港堂の資本が撤収された所為もあるであろう、初集本は元版に比して、表紙・本文とも紙質が一段と粗悪になる。本文の印刷も、使用するインクに朱・藍を混えず、墨一色で刷る所為か艶がなく、全体として煤けた感じがす

⑩『澳洲歴険記』表紙
元版本（第三形式・第五種）

⑪ 同　初集本

る。しかし、其処には民族資本による独立経営という誇りがあった。「初集」に続いて、翌四年には「二集」百種一百六十二冊の刊行を開始し、五年春には「三集」百種一百七十七冊が、越えて民国十年には「四集」の刊行が始まるが、これは二十二種三十五冊で中絶した。書物選択の基準が少しく古めかしく、「文学革命」以来、滔々と流込んだ西欧近代文学の潮流には、抗しきれなくなった為である。

却説、「二集」に収められた訳書の八割は、林琴南の翻訳が占める。これには、既刊の『林訳小説叢書』の紙型がその侭に流用された。再版・三版というのも、それを含めての版数である。「初版」に倣って、「二集」でも通し番号が用いられたが、全集を十編に分ち、各編に十編ずつの小説を収めるという方式は遺された。それは、主として販売政策の為であるらしい。「三集」の場合とても、同様であったろうか。呉梅編『顧曲麈談』(『文芸叢刻』甲集。民国五年十二月刊)下冊裏表紙の広告によると、当時第三集は未だ発行中で、「第一次発售／共二十五冊・定価六元五角」とある。つまり、この叢書は定期的に何冊かずつが出版されたのではなく、或程度括めて発売され、揃いで買うと割安になるという仕組みであった。本箱附という豪華な景品はもう附かなかった様であるが、「二集」の場合「零售五十五元、全部定価二十八元」と、殆んど半値に近いのだから、大変な値引である。

当然のことながら、ここに一の問題が起った。元版第二・第三・第四集の第一編から第十編までと、新企画になる第二・第三・第四集の第一編から第十編までとの間に生ずる名称の混乱である。若し、諸君の座右に、阿英氏編『晩清文学叢鈔・域外訳文巻』第一冊があるならば、手にされて巻頭の口絵を見られるがよい。其処には、『傀儡家庭』(イプセン『人形の家』)と『撒克遜劫後英雄略』(ウオルター・スコット『アイヴァンホー』)の表紙が掲げられていて、前者には「第三集第五十一編」、後者には「第三集第七編」とあるのを見出すであろう。各集百種ずつの小説が彙輯されているのだからと、うっかり見過してしまいそうだが、前者は新企画の「第三集」、後者は元版の「第三集」で、両者全く性格を異にし、絶対に混同してはならないのである。これは未だよい。同じく「第三集第七編」とするものに、『奇女格露枝小伝』(未見。原作未調査)があるということになる。しかも、同様な現象が、新旧合して六十種三十組の書物の間で見られるのである。

流石に、これには書肆の方も驚いたに違いない。だが、彼等の対応の仕方は、大人国の人らしく、悠揚迫らざるものであった。

既にして、読者は察知せられたであろう。上掲『寒桃記』の図版(写真⑥)で、「第四集第一編」の文字が、何故黒々と塗り潰されているのかを。これは、決して子供の悪戯ではない。誇り高き書肆の「良心のあらわれ」なのである。

註1. 旧稿「忘れられた清末の翻訳文学二三」(『野草』22)に於て、筆者は、説部叢書本『回頭看』は李提摩太(Timothy Richard)訳『百年一覚』の盗版かと疑い、あらぬ推測を試みたが、両者は全くの別訳で関係はない。T. リチャードのこの訳は、もと「回頭看紀略」と題し、『萬国公報』第三十六次から第三十九次(自光緒十七年十二月至光緒十八年三月)にかけて連載され、光緒二十年、広学会から『百年一覚』と改題して出版されたものである。『百年一覚』は未見に属するが、恐らく「回頭看紀略」に若干の筆を加え、「来稿」とのみ署していたのを、「李提摩太訳」と明示した程度のものであろう。「回頭看紀略」は、冒頭に「美国現出一書回頭看、名儒畢拉密君著也。所論皆美国後百年変化諸事。西国諸儒、因其書多叙養新法、一如伝体。故均喜閲而読之。業已刊印数十萬部、行於世。今訳是書、不能全叙、聊訳大略於左云々」とある様に、全くの梗概を綴るだけのものである。徐維則の「小説書録」に、「惜此本未全耳」とあるのは、それを指すものと考えられる。

因みに、ベラミーのこの小説が、康有為の『大同書』に何等かの影響を与えているであろうことについては、既に Martin Bernal 氏の *Chinese Socialism to 1907*. (Cornell University Press. 1976) に論があることを、該稿執筆の直後、狭間直樹氏の『中国社会主義の黎明』(岩波新書、1976)によって教えられ、次いで未だ拝芝の機を得ない坂出祥伸教授・後藤延子氏から、玉稿の抜刷に添えて懇切なお手紙を頂いた。それぞれに見解の相違はある様だが、筆者は、矢張り影響はあると見ている。

註2. 樽本照雄氏「金港堂・商務印書館・繡像小説」(『清末小説研究』3)。

(なかむら ただゆき・甲南女子大学)